

今回、何か記事を書いてほしいとの要請があったので、自分がMRAにかかわった軌跡を辿ることにした。殆ど挫折の歴史になるかと思うし、読まれる皆様に興味を引くものではないとも予想するが、ここで整理するのも自分なりに意味があるとも思えた。

大学に入学が決まったころ、ドイツ劇“Hoffnung”が来日して、上演していた都市センターへ手伝いに行ったのがMRAを知ったきっかけだった。

60年安保の年で世情が騒がしい時で、その年には劇‘タイガー’が中南米を回り始めていた。

それには参加しなかったが、1962年秋には小田原でアジアセンターが開所した。

在学中出来るだけ活動に参加したかったが、学業が忙しくて十分な協力が出来ず悩んでいたこともあった。工科系の単科大学だったので、もともと社会的、政治的な関心が薄く、学生たちにも社会的な運動に参加しようとするような雰囲気もなかった。他の大学には休学して活動に参加していた学生達もいたが、自分は家庭の事情でそこまで踏み切れなかった。

卒業が近づくにつれて、活動を継承してくれる人を探さなければと思った。やはり自分が主体性をもって当たらなければならぬと決心した。その時期当時のMRAハウスのスタッフの方々には大変に協力していただいたことは今でも感謝している。まず人に会わなければ何も始まらない訳で、単科大学であるが学内の多くの組織に訪問したりするようになったが、自発的にそのような行動をとるのはそれまで無経験だった。

自分の人生でも、結実するのかまた全てが無駄になるのか、この頃が最も不安でまた真剣だったと思うことがある。

卒業後の数年も何とか継続して、後輩の在校生のグループが全校の集いを計画して、MRAの劇“明日では遅すぎる”を招待・上演出来たのは自分の一生の思い出である。

社会人になって少し時間が過ぎると、仕事も多忙になり、そ

れなりに責任のある立場となると、MRA活動もどうしても疎かになり、MARチームの皆様との距離も離れてくる。これはMRA運動にかかわる人々に共通する問題だったと思うし、MRA運動も学校を作るなどいろいろ試行錯誤の時代だったような気がする。

大学での勤務を辞めて、身内のベンチャー企業で働くようになったが、その時期にバブルが崩壊した。その影響で殆ど貯金も使い果たすような危機に陥った。その後、自棄になることもなく何とか立ち直れたのは、若い時を思い出して、‘まだ自分でも世界のために何か出来ることもあるのでは’の気持ちを持ち続けたことに拠ると思っている。

ここ数年はIC事務所での会合やその他のイベントにも出来るだけ顔を出すように心がけていて、刺激も受けるが、それほどお役に立っているものでもないと感じている。

そろそろ自分も‘あっという間の一生だった’と言うような年代に近づいているが、我ながら無力さも感じているこの頃である。限られた時間の終焉までも模索するのが自分の運命なのかも知れない。



左が筆者 右側会員のMr. Hugh Wilkinson

論語塾を受講して 高見 龍也

人には人生の転機と思える場面が幾つかあることに異議を唱える人はいないでしょう。

私にとって、この「論語塾」を聴講させていただきまされたことは、まさしく人生の転機の一つになりました。

私は、二十歳ごろからキリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教、儒教、プラトン哲学などに関心があり、自分なりに本を読み、教会などに通って40年近く勉強してきました。

そして、それらのうちの幾つかの思想については、おぼろげながら自分なりの理解ができたように思っています。(もちろん、一つの宗教教義の理解のために一生を捧げる方もいらっしゃるぐらいですから、私の理解は浅いもので、独善的であることは承知しています)

しかし、儒教については、有名な「少年老い易く学成り難し」「巧言令色少なし仁」などは知っているものの、解説書を読んでも

難解で孔子の思想の全体像が描けません。ところが、矢野名譽会長の講義を拝聴し、ご自身の実社会での経験や趣味を通しての体験談を交えながら話してくださる解釈を聞くと、「ああ、そうか。そういう解釈ならば腹に落ちる」ということが多々ありました。また、講義の中で紹介して下さった幾つかの本を勧められるままに読んでみると、これがまた感動的な本ばかりで私の考え方の一大転換をもたらすような名著でした。この「論語塾」を聴講できてとても幸せでした。開講して下さった矢野名譽会長、事務局及びスタッフの皆様へ心より御礼申し上げます。



事務局からのお知らせ

新役員体制となって3か月が過ぎました。今回お届けする「IC ニュース vol.34」は、新体制として取り組む事業と課題、また交流会(論語塾)に参加しての感想、人生におけるMRA/ICとの付き合いなど、多彩な内容となりました。ご一読いただければ幸いです。

なお、多くの皆様にご参加いただいております「論語塾」は、

昨年9月の開講以来10回を重ねてきましたが、7月、8月はお休みさせていただきます。9月から再開の予定です。

また、会員の皆様には今年度の「会費納入のお願い」を同封させていただきます。よろしくお願い申し上げます。会費は、ICニュース、事業報告書、総会案内などの資料作成及び会員の皆様への郵送料等として、大切に使用させていただきます。(事務局)



公益社団法人 国際IC日本協会

発行年月日 2022年7月10日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エテルナル206号
TEL: 03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail: info@iofc.jp HP: http://iofc.jp
<International Iofc> HP: www.iofc.org

頒価 1部 200円

国際IC推進議員連盟とウクライナ大使 会長 藤田 幸久

6月2日国際IC推進議員連盟総会に出席しました。会長が河村建夫元官房長官から中曾根弘文元外務大臣にバトンタッチされました。国際IC(MRA)の紹介ビデオが上映され、1950年に32歳の中曾根康弘議員がスイス・コーのMRA世界大会に参加した映像などが紹介されました。マッカーサー司令官によって戦後初めて海外渡航を許された73名の大型使節の一員でした。コーにおけるドイツとフランスとの劇的な和解の場面や、米国議会で日本の国会議員が戦争中の行動について謝罪した演説なども上映されました。

コーにはこれまでに、片山哲、岸信介、福田赳夫、中曾根康弘、羽田孜、鳩山由紀夫、加藤シズエ、谷川和穂、江田五月、狩野安、柳沢錬造氏など多くの国会議員が出席しています。

この議員連盟は1996年に設立され、これまで羽田孜、谷川和穂、河村建夫議員が会長を務めてきました。森山浩行議員が事務局長です。ウクライナ危機に対して貢献していこうとの方針が示されました。

10日はセルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ大使を表敬しました。ロシアによる侵攻以来、不眠不休の活躍をしておられます。1000人を超える日本滞在中のウクライナ人への対応がその中心です。負傷したウクライナ人男性を入院先の千葉大病院に見舞うなどきめ細かに行動しています。今後も様々な支援をして参りたいと思います。



左 藤田会長
右 セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ大使

温暖化が進むなかで、異常気象現象が起こっていますが、皆さま、お元気にお過ごしでしょうか。2019年に始まったコロナ禍に、世界中の人が苦しめられましたが、ようやくコロナ禍での日常生活が動き出しました。マスク着用と検温・手指消毒の徹底を条件に、陸上競技、水泳、サッカーなどのスポーツの観客の規制が徐々に緩和され始めました。長く低迷が続いた、観光業界も徐々に人手が増えてきました。私も妻と一緒に、長野県善光寺(7年に1度の御開帳)に出かけましたが、多くのシニア(観光バスツアー)でにぎわっていました。満70歳の私は、次回が最後のチャンスかなと、回向柱に手をかざしてお祈りしてきました。また、鎌倉の鶴岡八幡宮にも参拝しましたが、大河ドラマ(鎌倉殿の13人)の影響から、修学旅行生や着物の若いカップルに混じって、多くのシニア客(観光バスツアー)も参拝していました。

話は変わりますが、私(当時26歳)をMRAの人たちと引き合わせていただいた、小嶋千鶴子さんが、106歳で大往生されました。当時、ジャスコ大阪本社(今のイオン)の一室で、“採用プロジェクトリーダー”をしていた私が、小嶋常務に呼ばれて、「私の代わりにこの会合に出てきなさい」と言われて、訪問させていただいたのが、神戸市住吉の「住友研修所」でした。もちろん、私にとっては、別世界でした。それから44年が経った現在、国際IC日本協会の副会長兼専務理事をさせていただいている自分を振り返ると、多くの素晴らしい諸先輩に導かれてきた人生だと思います。

今回の会員総会で退任された矢野(前)会長には、付いていくのが精一杯だった未熟な私に対して、多くの指導やアドバイスをいただきました。また、矢野会長の後任として、新しく会長になられた、藤田新会長は就任以来、驚くほどの「行動力とコミュニケーション能力」があり、矢野会長同様、私は、ただ遅れないようにしていくように心がけています。さらに、新しくご就任

いただいた道畑監事からは、これまでになかった新しい視点から貴重なご意見を頂戴しています。また、「縁の下の力持ち」として、宮下事務局長の献身的な行動力には、本当に感謝ばかりです。



このような背景の中で、2022年度の大きなテーマである、「新ホームページへの移行」と「国際IC協会の知的資産のアーカイブ化」も大きく前進しました。前者は木村理事のご子息木村陸さんの若い発想力と行動力のお陰で第1ステージの「新ホームページの枠組みと旧ホームページからの移行」が完了しました。今後は、第2ステージの「ブログ活用、ギャラリー充実、イベント募集」などの新ホームページ活用に入りました。後者については、田中章博さん(前専務理事)の卓越した英語力と献身的な努力によって、海外の「For A New WorldのGunnar氏とのオンライン会議が実現しました。こちらも資料のデジタル化とNAS(共有インターネットハードドライブ)へのアップロードといった、具体的な実施ステップに移行しました。またこの2つのプロジェクトをシステム面から力強く支援していただいている太田敦之さんと佐々木理事、さらに、アーカイブでは中嶋良樹さんと中山啓介さん、川勝鋼太郎さんの支援をいただいています。

新年度が始まってから半年になりましたが、IC精神に則り、「Who is Right?(誰が正しいか)」の議論ではなく、「What is Right?(何が正しいか)」の議論を、葛藤を恐れずに勇気をもって行うことの結果がこれらの成果に結びついていると感じています。

今後も事業については、藤田新会長を中心に理事会が一体となって、新しい理事会として目標に取り組んで参る所存です。引き続き、皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます

小田原アジアセンターが閉鎖となって久しく、ここ数年は新型コロナウイルスの影響で様々なイベントがオンラインで行われることも一般化しております。そんな中、国際フォーラムの在り方もゼロベースで見直し、整理して再出発することと致しました。

【国際フォーラムの現状考察】

小田原にアジアセンターがあった頃から、ほぼ同じ内容を踏襲しています。これは、ここまで企画に携わってきた方々が、努力を重ねてきた結果とも言えます。具体的には、以下のような内容、および雰囲気・機能を持っています。

- ◆海外のゲストを招き、国際的な雰囲気の中、社会課題やICの理念の実践について話し合う国際会議
- ◆個人と家庭、社会と国の健全な発展に資するための、静かな時間やファミリーグループ
- ◆講演会やパネルディスカッションの開催
- ◆国際的な視野をもった青少年の育成に資するためのトレーニングの場として、世界のICの若者による運営
- ◆報告書の作成
- ◆ICを知ってもらい、活動を普及させるための新会員獲得の場
- ◆旧知の仲間と会い、再会を喜び、その間の実践を共有する同窓会のような場

【国際フォーラムの問題点】

しかしながら、ICを取り巻く様々な状況と、時代の変化により、これらすべてを同時に達成することは非常に困難です。具体的には、下記のような問題が挙げられます。

- ◆開催場所の確保
- ◆参加者数の減少
- ◆日程縮小と通いスタイルへの変更
- ◆運営する側の負担増大(昨年の国際フォーラムアンケート分析結果から)

また、国際フォーラムのみならず、会員の絶対数減少も関連する大きな問題の一つと言えます。「海外の若者」にトレーニングの場を提供してきたものの、国内で運営できる人材は、今後を担う世代にはほばいないのが素直な現状で、ここも大きな問題です。つまり、これまでのやり方では、『ICを知ってもらい、活動を普及させるための新会員獲得』には成功しておらず、見直しをかけるべきと考えます。

【新たな国際フォーラム】

国際フォーラムは、公益目的事業として、内閣府に、「老若男女を問わず誰でも参加できる国際会議」と届け

出ており、参加者は広く公募することが必須です。それを第一に、下記のようなコンセプトで企画するものと致します。

★国際フォーラムとは・・・「社会問題」の実状を学び合う場

社会問題の一つをテーマとし、テーマに沿った講演や発表などを行います。「参加型」のイベントとして、静かな時間とシェアリングで、一人一人が、今から、明日から実践できることを考える場、とします。一人一人の行動が、それらの問題の解決の一助となることを目指します。

また、これまで2日ないし3日に渡る日程で開催していましたが、国際フォーラム自体は、半日、数時間程度の日程と致します。

【国際フォーラムからは分割するもの】

◆海外メンバーの参加や、海外メンバーによる運営は必須としません。但し、海外からの参加や、国内在住の外国人などの参加は、むしろ歓迎します。

◆国内メンバーによる運営を基本とします。

◆国際フォーラムの中で、ICの他の活動に関連する内容は取り上げません。例えば、東北アジア青少年フォーラムの参加報告や、学校訪問メンバーによる発表などは、行いません。

◆これまで重視されてきた内容であり、引き続き重要なものでもある、上記のような活動報告や、海外メンバーとの交流、旧知の仲間との再会や親交、ファミリーグループなどは、別のイベントとして企画することとします。

◆新たな会員を募るための活動については、これまで奏功してこなかった反省も含め、協会としての方針を検討します。新たな国際フォーラムに、会員以外の方にご参加頂くことはもちろん歓迎しますが、それがイコール新しい会員を増やす活動ではありません。

以上、これまで少し頑張りすぎている感もある国際フォーラムですが、頑張るがゆえに分かりにくくなっていた目的を見直して、絞り込みました。新たな時代と、協会の現状にあわせて、整理した内容で企画致します。

国際フォーラムのみならず、今後も皆様に継続してご協力頂くことも多いかと存じますが、引き続き、皆様のお力をお借りできましたら幸いです。

